

## 「大嫌いだっただ妹」

山下 恵菜

私は妹が大嫌いだっただ。

私が産まれた時、初めての子ども、初めての孫だという事もあり、みんなにとても可愛がってもらった記憶がある。そんな私が三才になった時、妹が産まれた。みんな久しぶりの赤ちゃんをとても可愛がっていて、私はどこかさみしい気持ちになった。

私が幼稚園に通うようになった頃から、妹はよく体調を崩して、入退院を繰り返すようになった。妹はまだ小さかったのですが、お母さんがずつと付き添いで病院へ泊まっていた。その間私は、お父さんの仕事の都合で両方のおじいちゃんおばあちゃんの家へ交互に預けられていた。そのせいで幼稚園を休む事も多くなった。そんな事が何度もあり、私は余計に妹が嫌いになっていった。

「妹なんていけない。妹なんて産まれてこなければ良かったのに……！」

ある日、妹がまたいつものように高熱を出した。でもいつもと様子が違った。ぐったりしていた妹の唇はほとんど真っ黒になって、意識がなくなっていた。お父さんとお母さんは慌てて救急車を呼んだ。救急車を待つ間お母さんは泣いていた。そんなお母さんを見て私はハツとした。「妹なんていけない……」なんて私が思ってしまったからだ！そう思うととても怖くなり、みんなにはれないように心の中で「ごめんさない、ごめんさない！」と何度も何度も繰り返して叫んだ。

妹は熱性けいれんという病気になるっていた。熱も高くて、けいれんしていた時間も少し長かったので、そのまま入院になった。「このまま戻ってこれなくなったら私のせいだ」そう思うと涙が出た。しばらくして、妹が元気になり、退院できることを知った。

退院の日、病院のエレベーターの扉が開いて妹の姿が見えた瞬間、私は一目散に小さな妹の元へ走りハグをした。私に会えて嬉しそうにする妹に「ごめんね」と小さな声で言った。妹は少し不思議そうな顔をしたけれど、「いいよ！」と満面の笑みで返してくれた。それから私が時々熱を出すと、妹は必ず「大丈夫？痛くない？」と声をかけてくれた。そんな妹を見て、自分がどれだけ小さくてかっこ悪いお姉ちゃんだったのかを知った。

そんな妹も今では三年生になり、体も強くなって病氣もめつたにしくなっていた。でもあの時と変わらず、家族の誰かが病氣になると、「早く元気になってね、大好きだよ」と手紙を書いて、必ず枕元に置くのだ。家族の中で、誰よりも病氣で辛い思いをした妹は、誰にでも優しくいつも笑っている。みんなの太陽のような存在だ。まわりを温かく優しい気持ちにしてくれる。普段はケンカばかりしているけれど、家族の大切さ、命の大切さを私に教えてくれた妹が今では大好きだ。

私の妹になってくれてありがとう。これからもよろしくね。